

Title	ある忘れられた社会運動家のこと : 中名生幸力の生涯と事績
Sub Title	Life and thought of a forgotten anarchist : Kohriki Nakanomyo
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1987
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.80, No.2 (1987. 6) ,p.148(54)- 160(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19870601-0054
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19870601-0054">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19870601-0054</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



## ある忘れられた社会運動家のこと

—— 中名生幸力の生涯と事績 ——

小松隆二

### 1. 忘れられた社会運動家

宮城県岩沼市は、通常の観光・旅行案内書には取り上げられることのない人口3万7,000余の地方小都市である。仙台藩の穀神として伊達家とも縁が深く、日本三稲荷の1つといわれる竹駒稲荷神社、金蛇弁財天と牡丹祭の金蛇水神社、それに松尾芭蕉も句に読んでいる武隈の二木の松などが知られながら、通俗の観光の対象にはならなかったのである。

この小都市に竹駒寺という由緒のある寺院がある。真言宗智山派の名刹である。たまたま法要で同墓地を訪れたある歴史研究家がそこで1つの発見をした。1985年9月の彼岸の日のことである。

その研究家が法要の合間に何気なく墓地を散策してみた。そのとき、ある一郭でふと足を止めた。〈中名生家之墓〉と横書きされた墓碑銘が目にとまったからである。周囲はほとんどが縦書きの碑銘の、ありふれた墓なのに、そこだけが他と違っていたこと、その上、たまたまそれが珍しい〈中名生〉の碑銘だったことで、おやっと立ちどまらざるをえなかったのである。

同じ墓所の中であるが、その墓の横に、黒光りする墓誌がある。のぞきこんでみると、その筆頭に〈昭和五年五月十日 中名生幸力 三十二才〉の文字が鮮やかに刻みこまれている。その研究家が長年研究対象にしてきた社会思想・社会運動の流れに名をとどめている人物の名で

あった。中名生が仙台の人ということはわかっていたが、母の郷里である岩沼に永眠しているのを知りえたのは、新発見であった。偶然の発見だけに、驚きと喜びを隠しえなかった。とりわけ活動も人生もこれからという早世を知らせる〈三十二才〉の文字が、中名生の薄幸の生涯を想起させ、脳裏に焼き付いて離れなくなった。広い墓地にはとくに正門とか入口といったものはないが、正面中央から墓地に向かってやや右側、正面前の道路に面したところに、その墓は位置している。この研究家の名は宮城県柴田郡柴田町に住む後藤彰信氏。『日本サンジカリズム運動史』（競週社、1981年）の著者である。

過去のある時期に、思想・運動団体のリーダー的な地位にもついて、相当目立った活動をし、その当時の思想・運動団体の機関紙誌にはよく名前がでてくるほどの人物でも、その後すっかり忘れられてしまう例は決して少なくない。中名生幸力もそういった1人である。ただ中名生の不幸は、その後名前を忘れられてしまうこと、それだけにとどまるのではない。まったく稀に彼を取り上げている文献が批判や非難の目でしか彼をみていないこと、しかもその評価の根拠となるデータが明らかに事実と反するものであったり、十分に検証されたものではなかったりしていることによる。

中名生は早稲田大学在学中に学生運動に飛び込んで以来、民人同盟会、暁民会、オーロラ協会、五月会、小作人社、農村運動同盟、日本社会主義同盟、自由労働者同盟、労働運動社、戦

線同盟など多くの団体に関与。弾圧の厳しい時代に職業運動家（といっても、それで生活ができたわけではないが）として生涯を終えている。ただ彼は宿痾の結核もあって大正末には運動の第一線から離れ、しかも早世する。それに彼の立脚した陣営が丁度彼が第一線より退く頃から後退の速度をはやめ、現在はほとんど影響力を失っている。これらのことも与って、同時代に活動した他陣営の運動家に比しても、その後の彼の扱いは恵まれたものではなかった。

それにしても、中名生が大正期の社会運動に残した足跡まですべて消し去ることはできないだろう。ことに学生運動の生成期に運動に参加、リーダーとなるだけでなく、それを足場に学生運動と大学を超える社会運動との間に接点を模索。日本における学生運動と社会主義運動との間に初めて協力・相互交流の場を形成する1人になったことは、看過することができない。近年、無名ないしはそれに近い思想家・活動家の発掘が盛んであるが、中名生のような人物の解明も、日本におけるアナキズム運動、ひいては社会運動全般の総合的理解には欠かせないであろう。

## 2. 誤れる中名生像

中名生について触れた文献がいくつかある。古くはギロチン社事件で刑死した古田大次郎が『死刑囚の思ひ出』（大森書房、1930年）に、早稲田大学時代と職業的運動家になった当初の中名生のこと、彼の妻秋月静枝のこと、二人の結婚生活のことなどを割合詳しく触れている。平林たい子は「婦人闘士物語」（『婦人公論』1930年8月）において、秋月静枝の回想とともに、中名生にもわずかながら触れている。戦後にいたると、江口渙『続文学半生記』（春陽堂書店、1958年）、近藤真柄『わたしの回想』（ドメス出版、1981年）、江刺昭子『覚めよ女たち』（大月書店、1980年）、それに拙稿「テロリスト詩人・中浜哲の思想と生涯」（『国家論研究』3, 5号, 1973, 74

年）などが、中名生ないしは妻の秋月にふれている。

人名辞典類では、青木書店『日本社会運動人名辞典』（青木書店、1979年）には、中名生の独立項はなく、同志との関連で5度名前のみ登場する。萩原晋太郎編『アナキスト小辞典』（アナキスト小辞典刊行会、1975年）には、独立項として登場するが、誤りがあるほか、生涯が明快にわかる形では叙述されていない。

中名生の後世の歴史研究書における不遇は、もっとも詳しく触れている江刺著『覚めよ女たち』が彼を批判の目でみていること、しかもその批判の根拠が主に江口著『続文学半生記』に拠っていることに象徴されている。江口の同書が誤りを多く含んでいることは、これまでしばしば指摘されてきた。中名生について言及する部分にしても、事実の誤りがある上、中名生に対して好意を持ってぬ江口の個人的感情も交錯している箇所である。そのような個人の回想を検証なしに利用した結果、全体としては好著といっってよい『覚めよ女たち』における中名生の部分は、彼に対する批判と誤記の目立つ叙述に陥るにいたっている。この点については、後に改めて触れることにしよう。

## 3. 中名生の出生と家族

中名生幸力（なかのみょう こうりき）は、1899（明治32）年5月1日、東京市下谷区で生まれた。父幸重、母リキの長男であった。幸重は6男2女の子沢山であったが、幸力は長子であった。

中名生家はもともとは宮城県柴田郡船岡町（現柴田郡柴田町船岡）の出身であった。船岡にはかつては各々独立の村であった上名生、中名生、下名生の3名生の地名がある。中名生家はそのうち、白石川が阿武隈川に合流する低地にある中名生地方の出で、熊野神社の神官をつとめる家柄であった。もっとも中名生家から神主をつとめたのは幸重の父、つまり幸力の祖父に

あたる義包が最後で、その後は神職とのつながりは絶えている。

父の幸重は国鉄勤務の鉄道員であった。幸力が仙台一中に学ぶ頃は、一関駅(当時は岩手県西磐井郡一関町)、早稲田大学に入学する頃は、陸羽東線の岩出山駅(宮城県玉造郡岩出山町)に勤務していた。その後、仙台駅等を経て、小牛田駅貨物主任、ついで常磐線の久之浜駅長に昇進した時に定年を迎え、退職している。仙台の小田原裏山本丁に400坪余の土地と住居をもっていたが、生活は勤務地の国鉄官舎で営まれるのがつねであった。

定年の際に、国鉄時代に長い間手がけた貨物業務の経験を生かして、郷里の船岡で、運送店経営の話しがあったが、堅物の幸重では商売は無理であろうと、妻リキの郷里である名取郡岩沼町(現岩沼市)に落ち着くことになった。それが1928(昭和3)年のことであった。

岩沼は、仙台平野の南部に位置し、町の南には阿武隈川が蛇行しながらゆったり流れる穏やかな町である。かつては水陸両面において交通・運輸の要衝として宿場町、あるいは竹駒神社の門前町として栄えた町であるが、交通体系の変化とともに、今は静かな小都市に変わっている。母のリキは岩沼の魚店丸山家の出。丸山嘉蔵・イナの2女である。妹も近くの酒店に嫁いだり、親戚のものが市議員や竹駒寺の檀家総代を務めたりして、岩沼ではリキの一族は安定した地歩を固めている。幸重一家が落ち着いたのは、リキの実家のすぐ近くで、町南60の5(現本町4の25)の地であった。現在はこの地には、幸力の弟隆一家が住んでいる。

後に見るが、幸力は生前は一度もこの岩沼の両親の下には足を運んでいない。彼がここを訪なうのは、東京で病死した後、母リキが遺骨を引き取って戻ったときが初めてであった。社会運動に飛び込んで要視察人として常時警察の取り締まり対象になってからは、公務員の父からは勘当処分にあっていたこともあって、父の勤務地にはまったく顔を出していない。自分が両

親の下を訪ねることによる肉親たちへの迷惑も考えて、そうしたのであろう。もっとも、岩沼に足を運ばなかったのは、すでに1928年頃は運動の第一線からは退いていたので、上記の理由に加えて、健康を害していたことも大きな理由であったといえよう。

#### 4. 中名生の早稲田大学入学と 社会運動への参加

中名生は1918(大正7)年3月、仙台第一中学校(現仙台第一高等学校)を第24回生として卒業。同年9月14日、早稲田大学高等予科第一部(政治経済学科)入学を果たす。保証人は、当初は北沢義重、すぐに中学時代に講演を聞いたこともある郷里の大先輩(仙台二中出身)で、早稲田大学教授、友愛会評議員でもあった牧師の内ヶ崎作三郎に依頼した。

小学校は仙台の東二番丁小学校であった(高等科1年終了)。中学時代には、性質・品行ともに普通かやや明晰とみられ、趣味としては文芸や園芸を好んだ。また雄弁家として通り、1914年10月30日に開かれた第4回懸賞暗誦会で、英語弁論1、2年の部で優勝(論題は“The Sun”)している。学業成績は1、2年は良好であったが、3年の3学期に気管支を病み、入院。以後、頑健だった体力も、成績もやや下降気味になっていく。それでも、全般的には地方官僚の父が息子に期待を抱きたくなるほどの生活ぶりであった。卒業が近づくにつれて、中名生は中央に憧れ、政治の道に心を動かされるようになる。

父に進学の希望、それも東京での進学を申し出ると、期待している長男でもあり、東北大学にでも入ってくれたらと思っていた父であったが、それを認めることにした。ただ鉄道員の収入はけっして多くはなく、家族数の多い一家でもあり、普段の生活を支えるだけでも大変であった。東京で学生生活を送りたいという息子の希望を簡単にはかなえてやるほど余裕はなかったのである。

にもかかわらず、父は東京で息子がそう苦勞をしないで学業にうちこめるように、無理をしても手だてを考えるつもりであった。その結果、仙台の持家を売ることもなるのであった。

このように長男の幸力が高等教育を受ける道を開いたことで、中名生家ではやがて二男以下も高等教育を受けやすくなっていく。

中名生が上京した頃、日本の政治も経済も大きく変わろうとしていた。第一次世界大戦による全産業にわたる活況、民主主義や社会主義思潮の流入・浸透、労働運動・社会主義運動の拡大が、若者に日本社会に新たな時代が到来しつつあるかのような期待を抱かせていた。そんな雰囲気は大学の中にも及んでいた。自由や革新を求める空気が充満していた。早稲田大学はそんな空気にもっとも強く影響をうけ、反応も示した大学であった。青雲の志に燃えて上京した中名生も、すぐにそんな風潮の虜になった。

彼が、1918年9月に、半年遅れで早稲田に入学した頃、すでに4月に早稲田の学生運動を担う高津正道、三宅正一らが高等予科に入学していた。先輩としては古田大次郎、和田巖、浅沼稻次郎らが前年の1917年に高等予科に入学していた。

中名生が初めて学生運動に参加するのは、民人同盟会であった。同会の結成は1919年2月なので、入学後、半年も経っていない頃である。古田大次郎は「高津はその頃、中名生幸力や和田巖と、民人同盟会を組織して、その牛耳を取つてゐた。……かうして堀江と高津に勧められて、僕は民人同盟会に加つた。そこで初めて、中名生や和田などを知つた」(前掲『死刑囚の思ひ出』)と回想しているので、中名生も同会の結成に関わつたか、少なくとも結成まもなく参加したことがうかがえる。彼は、眼鏡をかけ、身長もそう高くはないので、外見や体つきからすると、けっして目立つタイプではなかった。しかし活動家グループの中では、すぐに頭角をあらわしてきたのである。

同会の活動で注目できる1つに、大杉栄を講

師に招いたことがある。その交渉に中名生が、高津、古田、本多秀麿とともに、本郷区駒込曙町(現文京区本駒込)の大杉の自宅を訪ねている。大杉が曙町に住むのは、1919年6月からなので、講演会はその6月から、同盟会が解散する8月までの間に開かれたことになる。

ただこの講演会は、実現はできたものの、当然のことながら途中で中止を命じられ、中途半端な形で終わっている。講演会の中止後、中名生らは大杉を恩賜館に案内、懇談をしているが、これが後に問題になり、責任者の高津は大学当局から油をしぼられることになる。それに、この講演会がその運営をめぐる内部対立の因となり、終了後多くの脱会者を生み出すことにもなる。

その結果、結局同会は分裂。その混乱の中から、2派に別れて建設者同盟と暁民会の誕生がみられることになる。同年(1919年)8月のことであった。

民人同盟会の分解に際して、一方の高津、本多らは学外に向かい、暁民会を組織する。中名生は暁民会の方に関係する。中名生がこの会に参加し、指導的な役割を果たしたことは、当局の資料でも明らかである(社会文庫編『大正期思想団体視察人報告』柏書房、1965年)。この間の経過は、古田の記録がよくとらえている。「この講演会が済んで終ふと、僕と同じやうな脱会者が続出した。……かうして民人会は高津、中名生等5、6名を残すのみになつて終つた、が、流石遣り手の高津や中名生である。少時して暁民会として復活させ、目醒しい實際運動にとりかゝつたのは、えらいと褒めておいて良い」

(前掲『死刑囚の思ひ出』)。

このあと、中名生の場合注目されるのは、暁民会を足場に学外の、しかも早稲田の枠にとられぬ社会運動組織の結成や活動に尽力することであろう。オーロラ協会や五月会との関係がそれであった。

オーロラ協会は明治大学の学生久保清次、村尾繁一、長尾義熊らが、主に明治大学の学生を

結集して組織した近代思想の研究団体であった。結成は1920年11月。事務所は、お茶の水駅近く神田北甲賀町の駿台倶楽部におかれた。労働運動社、自由人社、望月桂の東京同人図案社らも一時期事務所をおいたところである。研究を目的に出発した協会は、しばらくは多くの学生の参加をみるが、次第に性格を変えていく。つまりたんなる研究組織から実践運動にも関心を示す方向への傾斜である。もともと研究団体といっても、「一切の近代思想を学術的に研究」するだけでなく、「思想界に於ける新紀元を画せん」(オーロラ協会綱領)という意気込みをもっていた以上、思想的な激動期にあった当時、実践運動への転化も時間の問題であったわけである。

中名生は、その実践運動、さらには左翼運動に転化する過程で協会に関与し、その方向に影響を与える。「最近幹部ハ新人会、暁民会等ノ急激ナル団体ト提携シテ實際運動ニ従事セント計レルノ形跡アリ注意中ナリ」(社会文庫編前掲『大正期思想団体視察人報告』)と当局も監視していた時期である。

この頃からは、外部のものには中名生がオーロラ協会の中心のような印象を与えるほど深くこの協会の活動に関わる。赤瀾会の創設者の一人近藤(堺)真柄らが、中名生を明治大学出身と誤って記憶していたのは(前掲『わたしの回想』)、中名生というと、明治大学生中心のオーロラ協会との結びつきが殊更強く印象づけられていたからであろう。

## 5. 大学からの除籍と 社会主義同盟への参加

この暁民会からオーロラ協会に関係する時期に、中名生は日本における最初の全国的で、しかも大衆性ももつ社会主義組織・日本社会主義同盟に参加する。早稲田大学の社会主義学生グループのほとんども参加した。しかもその多くは1920年12月9日ないしは10日の創立大会前後

に検束もされた。

この運動への関わりから、社会主義同盟に参加した早稲田グループは大学から退学処分に見られる。前掲の『大正期思想団体視察人報告』でも、「早稲田大学ニ於テハ本会(暁民会)主幹者高津正道、本田慶麿、中名生幸力、高瀬清ニ対シ退学スヘキコトヲ論示シタルモ本人等ハ之ニ服サリシ為11月30日放校処分ヲ為セリ」としている。

ただし中名生に関しては、手続きや形式の上では退学・放校処分にあっていない。というのは、この頃すでに中名生は学生身分を放棄した形になっていたのだから、処分のしようもなかったからである。彼は1920年4月14日、高等予科第一部(政治経済学科)の政治科を終了。本来翌4月15日に大学部入学という扱になるはずであったが、彼だけは入学の手続きを取らなかった。その正確な理由は不明であるが、運動に本格的に参加するに従い、大学よりも、社会運動に興味を移していたこと、それにとまって郷里の父から学費等の送金を停止されたことが理由として推測される。

大学当局としては、社会主義グループに手をやき、警察当局からもうるさくいつてくるので、何らかの処分をする腹づもりであった。そのため学生の地位・状況を調査したところ、中名生については大学部への編入手続きを取っていないこと、それによって早稲田大学の学生身分が宙に浮いた形になっていることに気付いた。つまり中名生が手続きを怠っていたため、早稲田に学籍を有す形にはなっていないので、彼に関しては大学としては責任もないかわりに、処分を発動する権限もない奇妙な関係にあったのである。

その結果、高津らが11月30日付で懲罰的処分による除名になるのに、中名生のみは、異なる処置を受けることになった。つまり当局は、彼に関しては懲罰的処分ではなく、大学部編入手続き未了を確認した上で、もともと存在しなかった学籍を抜くという意味での除名措置をとる

ことにしたものである。

## 6. 五月会の結成

早稲田大学からの除籍が確認される頃、中名生は主にオーロラ協会に関係していた。ところが、同協会がお茶の水の駿台倶楽部に事務所をおいていたことで、中名生にとっては、同所に事務所をもつ自由人連盟に出入りするアナキストや同派に近いグループと交遊をもつ機会が多くなっていく。その交遊がほどなく彼を農民運動とアナキズム陣営に向かわせることにもなっていく。

その前に、中名生はまず五月会の結成にあたることになる。もともと運動団体でも、ましてや要視察団体でもなく、学生中心の研究団体として出発したオーロラ協会が、中名生らの働きかけで左翼的な団体、しかも社会運動団体に変身するとともに、それに同調しない多くのものは同会から離反していく。最終的には、五月会の出発とともに、協会は自然消滅に追い込まれてしまう。

そこで残ったオーロラ協会の関係者は、同会を超えてもっぱら社会主義の研究、さらには実践運動に打ち込む団体の結成にすむ。五月会がそれであった。その中心が中名生であった。ある意味では彼が生涯においてもっとも純粋に、かつ熱心に運動に打ち込んだ活動であり、時期でもあったといえる。ここでの活動や交流が農民運動、自由労働者の組織化、アナキズムへの傾斜といったその後の活動や姿勢のもとにもなっていくからである。

五月会の結成は、会名のとおり1921（大正10）年の5月であった。社会主義同盟が解散を命じられる頃である。その際オーロラ協会は正式に解散したわけではなかったのだから、同協会の事務所はそのままであった。そのため五月会は同協会の事務所をひきつぐ形になった。会員には、中名生のほか、佐藤護郎、南芳雄、渡辺善寿、川崎憲二郎（悦行）らがあった。

会の活動は、週1回（金曜日）の例会のほか、外部での講演・演説会、争議応援などを行ったもっとも講演・演説会は警察当局の手で中止・解散を命じられるのがつねで、積極的に活用することは、不可能であった。そのうち例会が中心となり、その席に講師を招くようになった。争議応援では、埼玉県の小作争議を応援したりする。同地方で活動していた塚本恒次郎や長島新らとの関係からであった。その地には、渡辺善寿、川崎憲次郎らが会員としてかけつけて応援している。

中名生がのちに小作人社に関係するのも、このような関わりからであった。もっともこの農民運動との関わりが五月会のあり方そのものも変えていくことになる。

## 7. 結婚と社会主義運動への本格的な参加

晝民会からオーロラ協会に関係する頃、中名生はもう1つの重大事、それも人生の重大事に直面する。秋月静枝と知り合い、結婚にこぎつける出来事である。社会主義同盟に加盟し、早稲田の梓を超えようとしているとき、その早稲田時代の大きなおみやげとして、大学の近くに住んでいた秋月との結婚に踏み切るのである。上京して丁度2年位経過した1920年の夏から秋にかけてと思われる。

翌1921年6月には、長男の芋作が誕生する。芋作の命名者は労働運動社の和田久太郎である。和田は他にも山川均や望月桂の長男の命名者でもある。もっとも中名生は、関東大地震後、秋月と別れるときに初めて芋作を入籍するが（秋月はのちに純労働者組合の俵次雄と再婚するが、俵とも離婚する）、さすがに芋作の名は取らず、誠哉と改名する。それ以後、誠哉は祖父母、つまり中名生の両親に引き取られる。

このように中名生が結婚し、長男の誕生をみる頃には、まだ早稲田の学生のまま頑張っていた古田大次郎の目から見ると、中名生や高津正

道はりっぱな主義者に成長していた。古田は次のように回想している。「中名生や高津は、その頃一廉の主義者で納つてゐた。僕は彼等が、僕の畏れている人達と平気で談笑してゐるのを見て驚かされた」(前掲『死刑囚の思ひ出』)。

結婚ということになると、住居が必要になる。中名生は、上京後住居の方は転々と変えていた。早稲田大学に入って、最初に落ち着いたのは、本郷区(現文京区)駒込追分町31番地にあった富士見軒であった。しばらくすると、豊多摩郡戸塚町諏訪97番地の昌栄館、大学に近い下戸塚町1065番地の松村方と変わり、大学と縁が薄くなると、王子飛鳥山の近く滝野川に転居する。秋月と世帯を構えたのは、この地であった。その後、戸塚町源兵衛(現新宿区西早稲田)を経て、神田区(現千代田区)北甲賀町に転居する。

秋月静枝という名はいかにきれいな名であるが、本名ではない。当時では女性にかぎらず、明治期と違い、活動家が筆名なり異名を使うのはめずらしい。彼女が本名を名のらなかつたのは、家庭的な事情によるのか、それとも文学なりを志したことがあって、筆名を使ったことがあってそうしたのかは不明である。彼ら夫婦に相当親しいものも含めて、中名生以外の誰もが秋月を本名と信じていたし、秋月を「シーちゃん」と通称していた。この秋月が本名を名のらず、中名生もとくに本名を他人に知らせていないこと、そしてまわりのものもそれにまったく気付いていないことは理解に苦しむ点である。その結果、今日にいたっても当時の秋月を回想するものも、また研究者も、誰1人として、疑いもなく秋月を本名として受け止めることにもなるのである。

秋月静枝の本名は小野ちえ。両親は早稲田大学に近い東京都北豊島郡高田町字高田100番地(現新宿区西早稲田)に住んでいた。父小野清太郎の仕事は運送店であった。運送店といっても、小さな店を構える自営であった。

2人が知り合ったのは、中名生の下宿も大学も秋月の実家に近かつたことからであろう。2

人が結婚に踏み切る頃には、まだ秋月は運動には関係していなかつたし、赤瀾会も成立していなかつた。結婚といっても、当時の運動家の場合、子供でもできないと、籍を入れるといったことには無関心であつた。大杉栄のようにそのような法律やしきたりで形式をととのえる制度に意識的に抵抗するものもいた。中名生と秋月も役所には結婚届を提出しなかつた。今日の見方でいえば同棲ということにもなるが、明らかに結婚といってよい2人の結びつきであつた。

結婚まもない滝野川の新居は、主義者のたまり場のようになつた。川合義虎や中浜哲らのように居候をきめこむものもいた。中名生が親分肌で人が集まるのを好んだ上、秋月まで日本最初の女性社会主義団体赤瀾会に加盟するほどになることから、運動に理解があると受け止められて、若い主義者としては寄り付きやすかつたのであろう。しかし収入の限られた2人にとっては、他人がやってくることは出費につながり、秋月がつい愚痴をこぼすことにもなる。やがて他人の前でも、よく夫婦喧嘩が行われるほどになる。新婚直後というより、1922年頃の生活を中心にした回想ではあるが、古田は2人の結婚生活を次のように描いている(前掲『死刑囚の思ひ出』)。

「中名生は、その頃労働社(労働運動社のこと〔筆者注])の手伝ひに行つてゐた。彼は大杉君には相当目をかけて貰つてゐたらしかつた。親分を気取つてゐる彼の家には、いつも2、3人の大男がゴロゴロ食ひ潰していた。だから生活には随分困つてゐるらしかつた。しかし彼は平氣だつた。少なくとも平氣を装ふてゐた。静ちゃんの愚痴も余り気に留めないやうに見えた。それがよく彼等の間に夫婦喧嘩の種を蒔いてゐた。『静ちゃんがもう少し確つかりしてゐると名生(僕達の仲間では彼の事を略してミヨウ——名生——と呼んでゐた)も幸福なんだが』とは、僕達の親切な心配であつた。実際静ちゃんが、もつと確つかりしてゐて、中名生自身に『俺がおれが』といふ



高慢な心がなかつたら、彼も幸福だつたらうと思ふ。」

結婚後、まもなく中名生は五月会、秋月は赤瀬会の活動にうちこむようになる。

五月会の結成とともに、中名生は社会主義運動に積極的に関わるつもりであった。しかし状況は甘くはなかった。彼が考える以上に当局の姿勢は厳しかったし、労働者、学生たちの対応も思い通りのものではなかった。

都会での啓蒙・宣伝活動がうまくいかなくなると、農村に目を移す度合が強くなっていく。五月会にも、佐藤護郎ら労働組合関係者もいたが、労働組合陣営はすでに形ができており、学生あがりの主義者、あるいは労働者でないため職場につながりをもたない主義者に関与なり寄与なりできる範囲は限られていると考えざるをえなかった。次第に、彼らも、建設社同盟グループがそうしたように、運動の新天地として農村に目を向けるようになっていく。

なお結婚する頃、中名生の妹イネ(戸籍上はイ子)も、兄の幸力を頼って上京してくる。イネは幸重・リキの長女。1901(明治34)年8月の誕生なので、幸力とは2歳違いである。私立東華高等女学校(現県立仙台第二女子高等学校)を1919年3月(第13回生)に卒えての上京であった。上京後、兄の影響で社会主義婦人団体赤瀬会に参加。兄嫁の秋月と一緒に宣伝のピラまきをすることもあった。兄弟の中で兄幸力の影響で多少なりとも社会主義の方に傾いたり、運動に関係したものには、3男の正男、4男の重雄もいるが、イネがもっとも深いところまですすんでいったといつてよいだろう。

その後、鉄道省大井工場などの機械工として機械労働組合連合会のリーダーの1人でもあった田中貞吉と結婚する。しかし田中とはそう長く続かず、離婚。ついでやはり運動に関係していた馬場某(兄は株屋として著名であった)と再婚。小田原(緑 2-169)に移り住んだ。ところがこの結婚も縁が薄く、離婚。いったん東京を離れ、両親の住む岩沼に落ち着く。

戦後すぐに(1946年)、イネは岩沼から南下、阿武隈川を渡り、さらに亶理町を超えたところにある亶理郡山元町に嫁ぐ。ここでは結婚生活が長く維持されるが、結局離婚(1960年)。再び岩沼に戻った。3度の結婚では、いずれも子宝に恵まれず、それが、離婚の一因にもなっていた。結婚と家庭生活という点では必ずしも恵まれた生活を送ることができない生涯であったが、1982年、天寿を全うして岩沼にて永眠。享年81歳であった。兄幸力とともに、岩沼の竹駒寺の中名生家墓所に眠っている。

## 8. アナキズム陣営への傾斜

中名生らが農民運動を心がけ始めたのは、1921年秋頃であろう。古田大次郎が母を喪うのが1921年11月23日。その直前は、古田は看病や妹たちの世話で運動に余り関わるができなかった。「姉が来たので母はずつと落付いた。……夕飯の時だつた。中名生の所から、すぐやつて来ないかといふハガキが来た。その時分、中名生達の農村運動に手伝ふ約束をしてあつたので、その相談かと思つて、僕は母の落付いた暇に一寸出掛けて見る事にした」。母の死後は「中名生達と約束した農村運動の計画は、着々進捗した。仲間の渡辺善寿や長島新は、僕に早く来てくれとせき立てた。その時僕は一身を打込んで、淋しさを忘れたかつた」(前掲『死刑囚の思ひ出』)と思込込しているように、計画がすすめられたのが母の病臥中で、いよいよ本格的に運動に打ち込む気持になったのが母の死に直面して、淋しさに耐えている時であることがうかがえる。すると、遅くとも1921年秋には、中名生らが農村に目を向け始めたことが推測できるであろう。

小作人運動に向かうこの頃には、中名生は、アナキストないしは反総同盟系活動家とともに運動するところまで傾斜していた。小作人社も当初はアナキズム一本で固まっていたわけではないが、中名生自身は、この頃には、つき合う

ものの多くがアナキズム系か反総同盟系の活動家に限られるようになっており、すでにアナキズムに親近感を抱いていた。

古田の復帰をまって、いよいよ小作人社の旗あげがなされるのは、1921年12月であった。同人は長島、渡辺、塚本恒次郎、それに古田の4人であった。中名生は同人には入っていないが、実質的な同人であった。同人の4人のように小作人社のおかれた埼玉に移り、同人たちと同居生活ができなかったことが、同人に名をつらねなかった理由と思われるが、断定はできない。

この第一次小作人社は長続きしなかった。弾圧・監視が厳しく、機関紙は古田の編集した1号のみで終わり、演説会を催しても、聴衆ゼロという惨憺たる有り様であった。

力尽きた古田らは埼玉を引き上げることになるが、小作人社は解散しないで、存続させることになった。いったんは渡辺が中名生らの五月会の協力を得て引き継ぐ。しかるのちに、昭和にいたるまで、アナキズム系農民運動の中心になる農村運動同盟に合流することになる。1922年8月のことである。

この農村運動同盟は、小作人社と中名生、加藤高寿、宮越信一郎らが中心になって組織した。このときは同人が全国から参加するひろがりをもつ組織になった。10月にいたり、同盟は機関紙『小作人』(第2次)を創刊。中名生が発行・編集人となる。翌1923年春、過激社会運動法案が議会で問題になると、社会主義陣営、とりわけアナキズム系は全般的にはそれほど積極的に反対行動にでていないが、中名生は積極的に反対行動を訴える。この問題を契機に、中名生と他の会員との間に対立・離間が生じ、やがて中名生は同盟を離れざるをえなくなる。それに対して、同盟は除名処分を迫りうちをかけることになる(1923年6月)。

さて、話を先にすすめる前に、当時中名生が反総同盟の闘士の印象を活動家たちに強く与え、さらに戦後にたって彼に対する誤まった評価の因にもなる事件にふれなくてはならないだろ

う。中名生らが農村に目を向ける直前に開催された総同盟東京連合会大会(第2回)における主事退任事件がそれである。

まずこの大会と中名生の関係について、2人の記述を引いてみよう。

江口渙「芝四国町の総同盟本部で大会があったそのとき、傍聴している大杉や和田久太郎などのアナキスト仲間がだんだん弥次を入れはじめると、それに勢いをえた中名生は突然、演壇におどり上った。そして壇上にいた棚橋小虎(現在の社会党参議院議員)を引きずりおろしてなぐりつけた。そのことは、そのときアナキストたちの喝采をばくしたらしい。私はそれを直接に見たわけではない。だが、人からその話を聞いたとき、中名生の場合あたりのなやり方に何ともいえないほどの不潔さを感じた。それくらい心ひそかに私は中名生を軽蔑するようになった」(前掲『続文学半生記』)。

江刺昭子「ボル派、アナ派、社会改良主義者が激しく指導権を争った1922(大正11)年の総同盟大会の折には、社会改良主義者の棚橋小虎が演説しているのを演壇からひきずりおろして殴りつけたりもした。……この人の場合は一種の英雄主義や場あたりの感が強く、真面目に“革命”を考えたり、労働者の地位向上を願う人たちから見ると迷惑なときもあったらしい」(前掲『覚めよ女たち』)。

上記の短い文章の中には、重大な誤りがふくまれている。しかも、とくに江口の場合は、その誤認がもとで、中名生に対する批判や非難が形成されるといった論旨になっているため、見逃しにできない文献である。

棚橋が東京連合会主事を辞任することになるこの大会は、総同盟本部で開かれるが、「総同盟大会」ではなく、総同盟東京連合会大会(第2回)。開催は1922年ではなく、1921年7月5日。この日、棚橋は主事として、午前10時に開会の辞を述べたあと、議長に選出され、進行役を務める。ところが、代議員の選出をめぐる紛糾。

議事の中断を繰り返す。日立争議の指導のあり方や小論「労働組合に帰れ」(『労働』1921年1月)に対する総同盟急進派やアナキズム系の棚橋批判がたかまっていた直後でもあり、大会運営に対する批判が棚橋に集中することになった。午前中だけでも、野次怒号で、議長の棚橋はしばしば立ち往生。午後1時半の再開の際に、棚橋は午前中の混乱に責任を認め、議長を辞任する。それを受けて議長の再選挙が行われ、武田友太郎が選出されて交代、司会にあたる。これを機に、棚橋は東京連合会主事の地位も辞任。顧問として残るといふ連合会からの懇請も受けずに、総同盟をいったん離れることになる。

棚橋が総同盟を去ることで歴史的な大会となったこの東京連合会第2回大会には、大杉や和田久太郎は出席していない。出席したのは、アナキズム系では中名生はじめ、古田、川口慶助、八幡博道ら。彼らは、総同盟急進派の高田和逸や山本懸蔵らにあわせて、棚橋に激しい野次を浴びせている。中名生も先頭にたつて野次を飛ばしている。しかし棚橋を殴るようなことはしていない。組合の正式大会でよそものが議長なり主事を組合員の面前で殴るようなことがどのような意味をもつかを知らぬほど無責任ではなかったのである。この大会で組合員同士で乱闘が行われるのも、むしろ棚橋が退場してからであった。

江口の中名生批判は、地方大会であれ、総同盟の正式の大会において、その議長を殴ったことを前提にしてのものである。ある種の噂を確認もせず批判の根拠にしているところに、むしろ江口の中名生に対する個人的感情の表白をみてとることができるだろう。このような誤認がもとで、ある人物に対する評価の一端でも形成されるとしたら、どちらにとってもはなはだ不幸なことといわねばならない。中名生の場合、それが現実になった事例といえる。

## 9. 労働運動社同人となる

1922(大正11)年夏という、一方で<アナ・ボル対立>、他方で全国総連合運動に向けての合同運動が燃えさかり、戦前においてもっとも労働運動が戦闘化した時期でもあった。

丁度その頃、中名生幸力は労働運動社に参加する。同社は、いうまでもなく大杉栄らアナキズム陣営の中心的位置を占める団体である。中名生の同社への参加は、それまで彼が関わってきた運動やグループとの関係に変化が見られだすことを意味していた。とくに大震災後世間を驚かせるギロチン社の中心となる古田や中浜哲らとの離間が注目される。

ギロチン社の成立には古田と中浜の邂逅が鍵になるが、2人が初めて会ったのは、中名生の自宅においてであった。古田と中浜の2人は時とともに関係を深めていくが、中名生はある時期から2人とは離れていく。それがはっきりするのが、彼の労働運動社への参加の時であった。

中名生が中浜らと共同行動をとる最後は、自由労働者同盟の結成であった。埼玉から東京に戻った中浜らは、生活の糧を得るためしばしば出入りしていた深川の富川町、本所花町、神田三河町などの自由労働者の組織化にのりだす。会員は「人夫、車力、馬方、土工、小揚、及び之と境遇を同じくする一般の労働者を以て組織す」(規約第2条)と規定された通りである。

自由労働者同盟の創立は、1922年8月27日であった。リーダー格には、中浜、古田、中名生、坂野八郎・良三兄弟、伊串英治、白武栄、堀川久らがいた。結成にあたって「中名生は『これは如何してもアナの方だな』と嬉しそうに笑った」(古田大次郎前掲『死刑囚の思ひ出』)ということであるが、[中名生自身も、同盟にあっては「アナーキーの色彩の濃い人達」(「自由労働者同盟生る」『労働運動』第3次7号、1922年9月10日)が中心になっていると説明している。同盟はこの年の秋(9月)の総連合大会にも、中浜らを

代議員におくりこんでいる。

中名生は、大学時代からつねにリーダー的な位置に立ってではあるが、啓蒙・教育・宣伝よりも、自ら実践に参加する方に比重をおいて運動に関わってきた。しかし、古田らと同様に、彼も労働者にも農民にもなりきれなかった。それを身をもって教えられると、現場で直接運動に関わる位置から、啓蒙・宣伝的な位置に立つ方向に転進していく。その最初は、労働運動社への参加のときであった。同社への参加は1922年8月頃からであろう。彼の同人としての参加が同紙に初めて報じられたのが、同紙第3次7号(1922年9月10日)だからである。大杉栄が「編集室から」において次のようにふれている。

「中名生幸力が毎日通つて来る。寺田鼎が社に住みこむ。それに、泉夫婦が行つて女つ気なしになつたところへ、中名生の妻君の静ちゃんや折々やつて来て、台所の世話や皆んなの着物の世話をしてくれる。が、其の間は、誰れかが芋作君のお守りをする。」

ところが、中名生の労働運動社との関係はそれほど長くは続かなかつた。翌1923年2月には退社するからである。大杉が密航でヨーロッパに渡っている間、留守をあずかり、中名生の早稲田での先輩にもあたる近藤憲二が3月3日付けの「編集室から」(『労働運動』第3次12号、1922年3月10日)において「中名生は仕事の都合で退社した」と簡単にふれている。

労働運動社との関係は短いものであったとしても、中名生が同社に関係したことは、やがて非合法活動に入りこむ中浜や古田らと距離をおく契機になっていく。中名生は、妻子を抱えて、継続的な収入の道を考える必要があるなど自分以外の家族の生活にも責任をもつ立場にあった点で、もともとギロチン社グループとは完全に1つにはなれずに、むしろ異なる地点に立っていた。その上、<リヤク>には批判的で、堅実な活動路線に立つ労働運動社に関係したことは、中浜らの生き方とのずれを一層明白に認識させていくことになる。

## 10. 中名生の運動からの離反

先に、中名生が労働運動社を「仕事の都合で退社」という近藤の文章を紹介した。近藤のいう<仕事>とは、運動上のことではなく、生活上のそれであろう。大正期の社会主義者の生活は、定収入がないのが普通で、生活困窮者の部類に属する水準にあったといつてよい。とりわけ左派系では、堺利彦や望月桂らのように自らの家族の生活を立てる算段をつねに念頭においたものは例外であった。もっとも念頭においたところで、生活が立つようにするのは容易なことではなかつたのであるが。

中名生は夫婦で労働運動社に協力することで、少しは生活の支えにでもなればとも考えたのであろうが、主に大杉の原稿料を当てにしている労働運動社では、中名生夫婦に対してもせいぜい小遣い程度の提供しかできなかつたであろう。その結果、暮らしの立たない家計状況から、同社を退社せざるをえなくなり、何かは不明であるが、外部で仕事にありついたのであろう。

生活というと、中名生も夫婦でアルバイトをするのが精一杯であったが、同志たちと本の辻売りをすることもあつた。「夏の晩には早稲田の終点の辺で、中浜と僕は、中名生や妻君の静ちゃんや、その他2、3人で、よく本の辻売りをやつた。『青年に訴ふ』や『革命の失敗』『通俗社会主義』などの十銭本を、乳母車の上に並べて、演説の合間あいまにそれを売つた」(古田大次郎前掲『死刑囚の思ひ出』)ということであるが、中浜の講釈がうまく、一晩に3、40冊も売れたという。

生活に関連して、江刺前掲『覚めよ女たち』において、大震災前にも「アナーキストの退廃」といえるリヤク屋の流行が指摘されている。そして「幸力と静枝もリヤク屋になった。……静枝が幸力と組んでリヤクをやっているところを想像するとちょっとすごいかんじがする」と説明されている。アナキズム系のある部分がリ

ャクを盛んに行うのは、大震災後である。震災前にもリャクは行われていたが、全面化してはいたわけではない。近藤憲二が「この間、大阪の寒川光輝という奴が、『労働運動社』の名を騙って大阪の三越呉服店へ行き広告料の名義でいくらかの金をゴマ化したさうだ。……ほかにこんな奴がちょいちょいあるさうだ。お注意を乞ふ」(『労働運動』第3次12号、1923年3月10日)といっているように、アナキストの間でも、大震災前は普通のグループからはリャクは批判の対象であった。もっとも労働運動関係者や労働運動社グループは一般的には戦前を通してリャクとは無縁であったとみてよいだろう。

中名生、とりわけ秋月についても、震災前のリャクの実行については、平林(前掲「婦人闘士物語」)らの記述にもかかわらず、私は否定的である。アナキズム系ならすべてリャクをやったというわけではないし、ましてや夫婦でリャクをやるというのもむしろ現実的ではない。中名生夫婦は、リャクに当り前のように取り組めなかったからこそ、労働運動社に入り、中浜、古田らと離反していくと考えることもできるだろう。

それに大震災前に「結束力の弱いアナ派は、行動は派手だが、大衆の支持を失っていった」(江刺昭子前掲『覚めよ女たち』)という表現にしても、さらに検証の必要がある。大正期には広い大衆の支持に欠けていたのはどの派も同じであったといえるが、アナキズム系だけを震災前から大衆の支持を失っていたとするのはどうか。アナキズム系の後退の本格化はあくまで大震災後であり、安易に大震災前から同派だけが大衆と離反していたとするのはさらに検討を要するだろう。

ともかく中名生が生活のため労働運動社を去ったことは、彼と特定の団体とのつながりを弱めることになり、運動の第一線とも距離をおかせる第一歩になっていく。

## 11. 中名生の永眠と足跡の意義

中名生は、関東大震災後急速に運動の第一線から退いていく。1つの理由は病氣、もう1つは自らの考える方向に運動が進まなくなったことであろう。

中名生家では兄弟は大抵胸の病気に弱かったが、幸力もその1人で、胸を病む。結果的には、それが原因となり、早世せざるをえなくなる。また古田、中浜らかつて同志として一緒に運動したものが彼の考えるあり方と違う方向にすすんでいく。中名生が「絞首台に上る勇気もなかった」(江刺昭子前掲『覚めよ女たち』)からではなく、むしろ中浜らの運動についていけなかったから距離ができた、私は解釈したい。また農村運動グループとも離間したうえ、アナキズム系のシンボリック的存在で、中名生自身も世話になった大杉栄が虐殺され、運動陣営から姿を消す。このようなことが重なり、中名生の運動への情熱や意欲を少しずつそいでいく。

かくして大正末には、個々に争議などに関係する以外、中名生は運動には継続的には関わりをもたなくなっていく。昭和に入ると、活動家に対する当局の要視察人リストにもものらなくなっていく。

中名生が亡くなるのは、それからほどなくであった。すでに早くから患っていた結核が悪化し、東京の牛込区(現新宿区)戸山町にあった恩賜財団済生会病院に入院する。しかし薬石効なく、1930(昭和5)年5月10日早朝、永眠した。近いものからはみとられることもない怪しい最期であった。享年32歳。両親のどちらにも先だつ早世であった。

病院から死去の連絡をうけた岩沼の両親も、手紙もまったくくれなくなっていた息子ではあったが、さすがに驚いた。すぐに母が上京、遺体を引き取った。中名生家はもともと神道の系統であり、仙台にある神道の中教院に墓をもっていた。しかし岩沼に永住を決めた一家は、自

宅に一番近い竹駒寺に墓所を求めて菩提寺とした。幸力もそこにねんごろに葬られた。

すでにみたように、戦後、中名生を取り上げた文献は、彼に批判や非難を浴びせる厳しいものが目立った。しかし、それらが的確な根拠に基づく批判をなしていたのかというと、むしろ疑わしい。彼を批判する代表的な文献である前掲の江刺著『覚めよ女たち』は、その評価の根拠の1つとして、伊藤野枝の「社会主義者の墮落」をあげる。そこで、「かつて大杉の信任厚かった幸力を、伊藤野枝は『社会主義者の墮落』と極めつけている」と説明している。この伊藤の小論が掲載されたのは『労働運動』第3次12号(1923年3月10日)の一面である。ところが、この小論は中名生に関するものではない。中名生とは全く無関係の主張であり、当然墮落と批判されているのも、中名生ではない。伊藤と中名生夫婦の関係からも、批判を浴びせることはきわめて不自然である。そうであるとする、中名生に対する批判の根拠としては使えないものである。

この辺にも、中名生の再検討・再評価の必要を感じるのであるが、実際に彼の足跡を振り返ってみても、十分にそうするに価する人物といえてよいだろう。

ここで、結びにかえて中名生の事績をもう一度振り返ってみたい。まず彼は後に言われる<学生アナ>の先駆者であったことが指摘できる。アナキズム系には、東洋大学、早稲田大学、慶應義塾大学などの出身者が活動する時期があったが、大正末以降、彼らのように大学の出身者ないしは在学する活動家に<学生アナ>のニックネームが付される。そう呼ばれる先駆けが

早稲田に学んだ近藤憲二や中名生であった。

次に彼は、農民運動への関わり、とりわけアナキズム系による農民運動の先駆者でもあったことが指摘できるだろう。この点は小作人社などの動きを通してすでにみたので、中味についてはここではふれない。

さらに、中名生は都市下層に沈没する自由労働者の組織化の先駆者でもあった。この点もすでにみたとおりである。

最後に、学生ないしはそれに等しい身分で社会運動に関わり始めることによって、学生運動と社会運動の接点を追求する役割を果たした点である。学生運動と社会運動が渾然一体ないしは連帯関係にあったのは、大正期という初期的社会運動段階の特徴でもあったが、それに中名生も少なからず貢献したといえてよい。

以上のように、中名生はこれまで無名に近かった上、けっして恵まれた処遇や評価を受けてきたのでもなかった。このような人物の努力が総合されて日本の社会運動も発展してきたのであり、無名といえども、その足跡までないがしろにされてよいものではない。むしろこのような人物の解明がすすむときにこそ、社会(主義)運動の全体像も明らかになるときといえてよいだろう。中名生にしても、まだまだ不明な点、掘り下げの不足している点が少なくない。本稿にしても今後の解明の第一歩とするにすぎないものである。

[拙稿をまとめるにあたって、中名生隆、後藤彰信、山崎勝弘等の諸氏に大変お世話になった。心から御礼を申し上げ、感謝の気持としたい。]

(経済学部教授)